

2024年度
(臨時)
U12マンツーマンコミッショナー
講習会

2025/1/29

マンツーマン推進プロジェクト

1. 目的 (p4)
2. 課題から対応の考え方 (p6-8)
(20240628臨時マンツーマンディレクター会議)
3. 事前アンケートよりU12の課題 (p10-13)
4. 依頼事項 (p15)

1. 目的

1. 本講習の目的

- ① 情報の共有
- ② ブロック大会の基準について統一し、全国大会にむけての基準とする
- ③ 都道府県内でのマンツーマン推進に役立てる

2. 課題から対応の考え方

■ 重要な視点

- 1) マッチアップしているか、マッチアップしようとしているか
(人=マンツール、場所/エリア=ゾーン)
 - オフェンスのスタート
 - カッティングについていくか
 - トラップの後
 - ペネトレーションに対するヘルプの後

- 2) オフボールディフェンスのポジショニング、ビジョン (ボールとマークマン) を取ろうとしているか

<課題への対応策>

①長身者が制限区域内にとどまり続ける事象

②オフェンスリバウンドの後のマッチアップがない

③マッチアップが不明確な状態から、トラップに行くケースがある

④トラップ専門とされている選手がいる

→ マッチアップさせないといけないのでマッチアップを促す。改善なければ旗の対応あり。

U15でも同様の課題。(2-2-2、7-2-1)

→ 5-2-7でトラップを行わない=努力目標としての提示。(判定基準V-①)

→ 最初だけマッチアップして、その後マッチアップしないのは違反(5-3-1)

⑤完全にビジョンをなくす選手がいる

→ 技術不足の場合はやむなし(初心者が多い場合など)(3-3-6)

→ しかし上位に繋がるトーナメントでは相手が不利益を生じるので、促し及び旗の対応で改善を図る。

→ 都道府県上位、ブロック、全国では基本的に技術不足は考慮しにくい。

⑥フルコートでのスローイン時にスローインするプレイヤーへのマッチアップについて

→ スローインするプレイヤーにマッチアップできる場合、原則として適切なマッチアップを行うこと。

(7-1-2)

→ 意図的に異なるポジションを取っており、かつトラップやインターセプトを計画しているとみなされる場合は旗の対応を行う。

→ マッチアップしていることがMCにわかるようにすること。(1-2-1)

⑦アイソレーションオフェンスの際のディフェンスの捉え方

→ オフェンスが動かないのでディフェンスも動かず、ゾーンに見えるがマッチアップをしている状態

→ オフェンス側が引き起こしている事象であると考え。(判定基準Ⅶ)

＜課題への対応策案＞

⑧ スクリーン時のスクリーナーディフェンスの捉え方

- スクリーン後のマッチアップ状況を見る必要がある（1-3-3）
- 長身者が制限区域内にとどまり続けるような事象であれば改善を促す。

⑨ オフェンスからディフェンスの切り替わりにおけるマッチアップ

⑩ 本来マッチアップすべきものが違う（ガードはガード、ビッグはビッグというマッチアップ）

- 攻防の切り替わり時は必ずしもマッチアップすべき対象になるとは限らない（ガードはガード、ビッグはビッグ、というマッチアップ）、チームが決める自由度を与えるべき（MCは管理できない）
- ビッグマンを外に出したいからオフェンスのマークマン（シュート力がないものを意図的にマッチアップする）がアウトサイドへ出るがついていけないのはどうなのか、についてはMCとしてコントロールするものではない。
- マッチアップが異なるだろう、ということはMCがコントロールできない/ゾーンであるとは見做さないで、異なるマッチアップになっても旗の対象ではない。
- ディフェンスのスタートが1-2-1-1のような位置どり（エリア）からスタートすることはゾーンプレスとみなす。（まえがき）

⑪ ディフェンスヘルプローテーションの捉え方

- ヘルプが起こっている際は、ボールマンに二人集まることが起こる。これをゾーンとは見なさない。
- その後にエリアを守り続けようとするのか、マッチアップに戻ろうとするかで判断する。
（第4条ヘルプディフェンス）

<課題への対応策案>

⑫ フルコートでの最も遠いプレイヤーのマッチアップ位置

かなり裏パスを狙う位置に来ており、トラップから出てくるパスを狙うインターセプターになる

→ 本来オフボールオフenseプレイヤーへのマッチアップとは

「ボールマンになった時に戻ることができる、得点を防ぐことができる位置どりをする事」

(2線のポジショニングでの説明、基準規則では定義はされていない)

→ U12の場合「投げられない=ボールが行かない」ので「マークマンをマッチアップしているふりをして」「トラップや裏パスを狙う」プレーを指示する指導者がいる

→ 距離を規定することは、常に変化する以上、数値を示すことは妥当ではないので行っていなかった。
2線がどこまでヘルプに寄って良いのか、と同じ議論と考える。

→ **オフenseが空いているノーマークを攻めることで解決するべきであるが、それができないレベルの攻防において指導者がそのプレーを狙わせることに問題がある。(3-3-6、まえがき、5-2-7)**

→ 「ボールマンになった時に戻ることができる、得点を防ぐことができる位置どりをする事」に違反している、という判断

トラップを仕掛け続けることが U12攻防であるべき姿かどうかは、指導者の考え方に関わる。

指導者が倫理観を持ってコーチングすることが大切で、あまりにコントロールするルール作りで縛ることはマンツーマン推進の方向性に逆行する。

「子どもたちがバスケットボールを楽しめる環境作り」を再考し、
「バスケットボール本来の在り方に近づけること」を目指したい

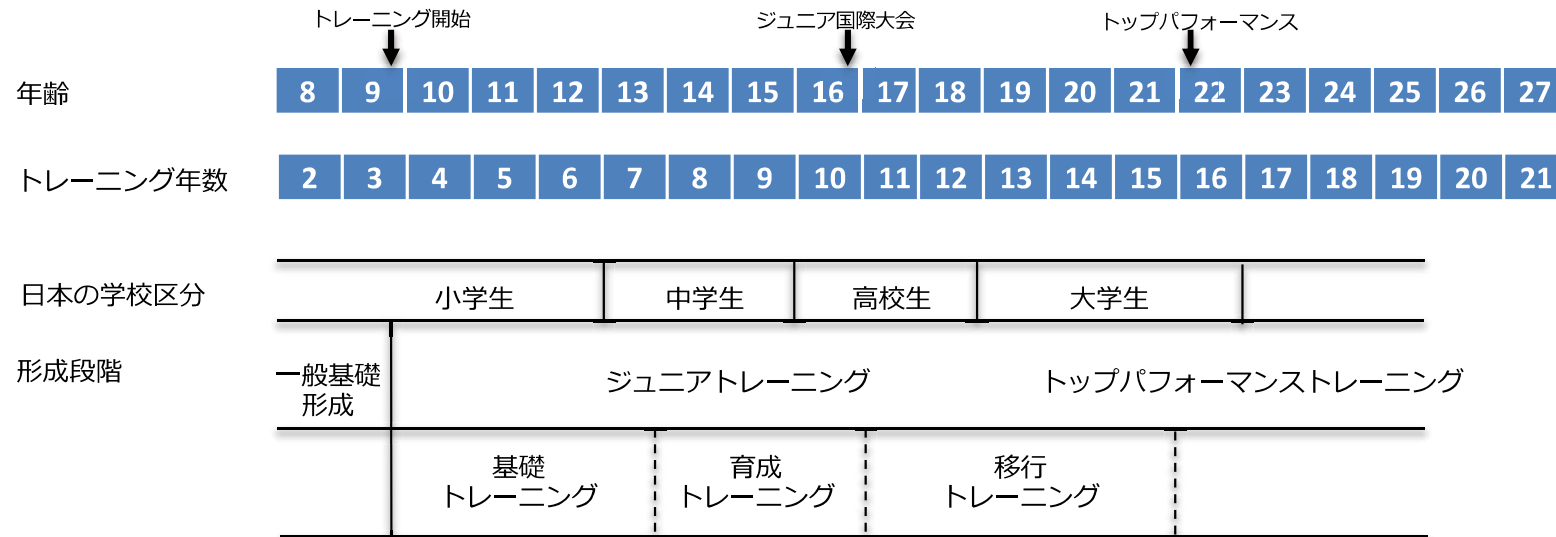
3. 事前アンケートよりU12の課題

- ① いつまで「推進」活動をするのか、どういう状態になったら「推進」活動を停止するのかご教示下さい
→ 12/15ディレクター会議で議論（次ページからの資料）
→ 事後アンケートより、方向性に賛成が大多数。
- ② 有利不利の状況判断もなくボールが入ったらトラップにいかされる選手のディフェンス力(1対1の力や状況判断力など)の低下が心配されると共に、育成よりも短絡的な勝利優先の戦術として用いる指導者が多いことについて非常に残念
- ③ 均衡したゲーム終盤のスローイン時にインバウンダーのマークマンが一旦、1.5m以内のマッチアップを行った後に、瞬間的に1.5mを越えてレシーバーに寄りカットをした。これは予測とみなして、OKですか？
もし予測として問題ない場合、同様の事象がタイムアウト直後に生じた場合は、ベンチの指示があったようにも捉えることができると思いますが。いずれも同じ判定になりますか？
- ④ ドリブルするボールマンに対してフロントコートからのダブルチームをおこない、パスやPNRでボールマンが変わった後も、DFが引き続きダブルチームで守る場合、ゾーンDFととられるのは、どんな場合か。また、トラップDFと判断され、継続してDFできるのはどんな場合か共通認識をはかりたい。

3. 今後の方向性についての議論経過

トップ選手を育てる 長期パフォーマンス育成の視点

<バスケットボールの例>



ナショナルトレーニングシステムにおける長期パフォーマンス育成の構造 (Pechte, Ostrowski, Klose, 1993) より改変

2024/12/15 マンツーマンディレクター会議資料

挙げられている意見

- ・高校世代（U16国体等）でゾーンアタックの経験が少なくうまく攻められない。
- ・MCの判断基準がバラバラでゲーム運営に問題が生じている。
- ・いつまでマンツーマン推進施策を続けるのか、先が見えない。

MCをなくしてマンツーマン推進を継続することを検討。

- ・MCをなくすことの問題は、ゾーンディフェンスを行うチームが出た場合どう対処するのか。

マンツーマン推進の施策を止める議論はこれまで行なっていない理由。

- ・高校世代でのゾーンアタックの問題が現実には起こっていることは理解できる。
しかし個々の状況判断能力向上のために、マンツーマンの攻防を活用することが優先事項と技術委員会においても意見が出ている。

マンツーマン推進を中止することへの懸念

- ・マンツーマン推進を施策として実施しなければ、U12U15ではゾーンディフェンス、ゾンプレスが多く行われるであろう
- ・育成世代で学ぶべき内容が指導されなくなる可能性がある。（施策実施以前に戻る）

マンツーマン施策は、ジュニアスポーツのあり方を示すものであり、継続が必要

- ・競技志向で考えると、ジュニアスポーツはトップスポーツパフォーマンスの前提トレーニング段階。
- ・勝利を第一に考えるのではなく、成長のために、身につけるべきことを行う年代。

2024/12/15 マンツーマンディレクター会議資料

適用区分の検討

- ・年齢別区別は難しい。色々な考えがあり、構成は難しい。
 - 大会で区切る、目指すレベルで区切る。
 - MCを推奨する大会としない大会で分ける。

U15選手権のMC設置の検討

<MCは不必要との意見>

- 抑止力がなくても全国大会はマンツーマンを行っている。
- BユースもMCなくても大会が問題なく終わっている＝声は上がっているとのこと
- ただし将来MCをおかない方向であっても、対応方法は整備して現場の方々に理解される必要がある。

<MCは必要との意見>

- Bユースは一つの団体であり規律があるため、同列で考えるべきではない。
- 何かあったときの対応が決まっていない中では混乱を招く。
- MCを設置しなくなったときの影響を考えるべき。
地区大会ではまだまだマンツーマンがしっかりできているとは言い難い。
U15選手権予選でも今後、教員以外の社会人コーチが指導するチームが勝利を求めて様々な工夫をしていくことが予想されるため、対応を明確にしておく必要はある。
- 下位の試合においてはまだまだ混乱が予想される。
- U12ではMCがまだまだ必要である。

2024/12/15 マンツーマンディレクター会議資料

★マンツーマン推進を評価して、段階ゴールの設定

1. 最終目標は「U12U15において、基準規則なしでマンツーマンを行うこと」

そのためには、

- = U15U12指導者がマンツーマンをやるべきとの理解が進むことが必要
- = 勝利を目指す、個々を成長させるためマンツーマンで勝負する
- = 「将来への土台を身につける段階」なのか「あくまで勝利を求める」の理解の違いを知る

2. 指導者の理解が進んでいないとの判断（=コート上でのプレーが判断基準）であれば、このままマンツーマン推進施策は継続

そのためには、

- = 「どのように指導者の理解ができているかを判定するのか」を示すこと

3. 現状は、全国大会・ブロック大会ではマンツーマン推進が浸透してマンツーマンを行っている。

- = ただし、MCを設置しないと、ゾーンディフェンス、ゾーンプレスが増える懸念もまだある。
- = 都道府県内全チームがマンツーマン推進を理解しているかといえばまだまだである。

これらのことから

- 浸透させる対象を、全国大会出場の指導者だけでなく、地区レベルで頑張っている指導者に焦点を当てるべきではないか。
- マンツーマンディレクターは、U12,U15の都道府県内での浸透度について把握に努め、マンツーマン推進が深まるように対象者を理解し、その方策（講習会等）の実施に向けて方策を検討することではないか。

2. 今後の方向性について (U12)

- ・人間なのでルールを監視する機構を設置しない限り、勝利主義な指導者は守ることはしないので、マンツーマンは置くべきと考えます。設置しないのであれば、マンツーマンを守らないチーム指導者に何かしらのペナルティーを与えなければ改善はしないと思います。
- ・まだまだ地方大会の地区予選では勝ちにこだわり、トラップやゾーンデフェンスが数多く見られマンツーマンの推進が必要です。
- ・いなくてもできるという指導者一人一人の意識の共有が必要かと思います。
- ・先ず旗を上げるではなく、コミュニケーションを取った上での旗対処。馴れ合いになるのは問題だが理解を求め、チームが試合に集中出来る環境を作っていく。
- ・当県では、U12・U15共催でマンツーマン推進講習会を開催しており、講習会を受講した者がMCとして活動していただくこととしている。U12においては、県大会の1、2回戦のMCは各チーム帯同制としていることから、全チームにMCがおり、地区大会から全ての試合にMCを配置しています。しかし、1度講習を受けると、スキルアップしない傾向があるので、スキルアップ研修の受講を義務付けるなどの検討が必要かと思っています。また、ブレイクルームの中での意見ですが、U15に関しては、どの県も先生方が中心となっていることから、人手不足が課題かと思われます。MCの割り当て等についても、かなりの負担感があるようにお聞きしました。MC名簿をU12・U15で共有していますが、ミニが終わるとMCを取得している保護者の方々もなかなか協力的ではないようです。なお、コーチの理解不足という点が何度となくご意見に出てきていますが、JBAのコーチライセンス更新の際に、Eラーニングでも良いので講習を加えてはどうかという意見もありましたので付け加えておきます。
- ・今、ゴミッショナー委員だけでなく、指導者も理解が深まりつつあるので、このまま継続して行った方が良いと考える。でないと、また以前のように、勝利至上主義の指導者も出てくると考える。
- ・最終的にはマンツーマンコミッショナーの配置がなくても、マンツーマンが行われることが理想である。しかし、現在の状況では推進以前の状況に戻ってしまうことが懸念される。
- ・育成段階の選手にとっては、マンツーマン推進はぜひとも必要な施策であるので、引き続き取り組まれることを望みます。これに対してもご指摘のように、MCで取り締まりというよりも指導者への丁寧な周知と理解促進の働きかけのほうがより重要ではないかと考えます。
- ・最終的にMCをつけないというゴールに向かって、育成世代の指導者にとってマンツーマン推進が当たり前の文化を目指して、継続して活動をしていく。

2. 今後の方向性について

(U12)

- ・今後MC無しでの運用を目指すとして、JBAとしての現状把握と目標設定が必要との話だったかと思います。そこについては、大きな指針を私達に示していただきたいです。そこについて考えたこととしては、
 - ①MC発足の理由として、FIBAタスクフォースによる国際大会出場制限などの制裁、そして国内施策への改善指導があったと思います。基本的には制裁のフェーズは終わったと認識してますが、現状での日本のMCという取り組みについて、FIBAからの意見や見識などは今でも何かあるのでしょうか？もしあるようでしたら、内容などご教示いただきたいです。
 - ②MCという取り組みについて、日本以外での同様の取り組み事例などはないのでしょうか？おそらくはヨーロッパがモデルになると思いますが、過去にマンツーマン推進が不足→何らかの施策で改善のような事例があれば、そこから日本ではどんな目標設定が必要か参考になるのでは、と思いました。
- ・今回のマンツーマン・ディレクター会議で、U15指導者の方と意見を交わす機会があり思った事があります。U15では、コミッショナーの判定が出来ない指導者や人員不足のことから、地区大会や県大会一回戦からコミッショナーを設置していないのが現状とのこと。ベスト8からはコミッショナーを設置している。しかし、県上位チームや北信越・全国大会を見ると、悪意のある様なディフェンスをしてくるチームは少なく、県大会一回戦など下位に行くほど現状が多いと感じます。特に、U15ではコミッショナーをした事がない指導者も多いため、判定が出来ない、わからないとの意見が多くあるそうです。U12では県大会一回戦から帯同でコミッショナーを行うため、指導者の皆さんがコミッショナーを経験する事が多くあります。経験する事で不明な事情や、疑問点が生まれるため、講習会でも活発な意見があります。全体に当てはまるわけではありませんが、U15の指導者皆さんも帯同でコミッショナーを行う経験値を増やしてみても？と率直に思いました。逆に、上位大会ではコミッショナーは不要とも感じました。一つの意見として報告します。
- ・3pを導入してどの様になるか。最終的にMC無しが理想だとは思ってます。

対応案⑫について

- 1) ⑫の対応がかなり多く見られるが、旗があがらない場合がある。ボールから一番遠いオフENSに対するディフェンスがかなり離している場合は旗を上げ注意や警告すべきか？

→ ボールマンになっても戻ることができない位置にいる時はあるべき姿に改善を促すようにしてほしい。

→ ボールが飛べば、マッチアップ違反として指摘できる。

- 2) 「（自分のマークマンが）ボールマンになった時に戻ることができる、得点を防ぐことができる位置どりをすること」に違反している、という判断。ここについて「違反」とする基準規則上の根拠が明確ではないように思いますが、結局はどう対応していくのかについて対応案⑫でのJBAとしての考えを私が汲み取りきれませんでした。

A：こちらの文言を今後基準規則へ追加していくのか

B：基準規則には追加せず、倫理的な話として指導者へ伝達していく形なのか

C：その他 についてをお伺いできればと考えます。

→ Bの基準規則には追加せずに指導者に改善を求めたい、というのが現状です。

基準規則に記載するには難しくケースによるからです。

原因はボールを投げられないことにありますが、U12世代で技術的にパスの距離を伸ばす、ということが求められます。

対応策案①②③④について

- 1) 長身者がペイントエリアにとどまり続けること、マッチアップが不明確な状態からトラップに行き、スクランブルな状態のディフェンスが続くことは、意図的・組織的なゾーンディフェンスでないとしても相手のオフENSにとっては不利益を被りやすいことだと思っていたので、課題として取り上げてもらえてよかったのではないかと思います。

「マッチアップが不明確で、ゾーンに見えますよ。（MCはそう判断しました）」という意味合いで積極的な黄色旗、コーチへの説明はあってもよいのかと思います。

→ 指導者には理解を深めてもらいたく、MCとしても説明の文言として使っていただきたいです。

対応策案⑥について「フルコートでのスローイン時にスローインするプレイヤーへのマッチアップ」

- 1) スローインするプレイヤーへマッチアップを行っていたが、パスを受ける選手が近くにきたのでダブルチームのようになってしまう。また、スローインするプレイヤーの目線やボールの動きによって、ポジショニングを変えたらダブルチームのようになってしまう。ということについてどのように捉えればよいでしょうか、スローイン時のマッチアップの距離が少し遠いときに起こりがちなシチュエーションです。
- 2) ⑥について原則マッチアップは分かるが、カウント後のスローインで間に合えばスローアーに入るが、遅れた場合にトラップ目的ではなくヘルプ目的くらいの感じでフリースローラインくらいまでしか出ない、何もなければゲームへの影響はないがヘルプの観点から見るとスペースを守ってしまっている。しかし、バスケット的に考えると明らかに間に合わないケースで必死にボールマンに行くことの意味はあるか？という疑問もある。
→ 意図的、組織的であると判断すれば警告を与えます。マッチアップを促すようにしますが、1.5m以内に必ず行ける場合ばかりではないので、裏パスを狙うなどの意図がなければそのままプレーさせます。

その他

- 1) これとは違う話題ですが、トラップディフェンスの定義「ボールをスティールできる距離」について話題にあがったことがあります。どのように解釈すればよろしいでしょうか。
→ 人により手の長さが異なるので、距離は数値化することが難しいです。これまではトラップの三要件が明記されていました。しかし現在はこの要件を外していますので、ここを細かく見る必要はありません。
- 2) 資料にある「指導者が倫理観を持ってコーチングすること」をもっと多くの指導者が理解し、実践してほしいと思います。
→ 仰る通りですので、指導者養成、U12/U15部会へも協力を依頼します。

- 1) ①ピックマンの制限区域でのステイが気になる、②フルコートでの最も遠いプレイヤーのマッチアップ位置が離れすぎの場合の旗上げが不足が気になる
- 2) 旗の対象となるプレーが減少しておりますが、マンツーマン推進が行き届いていない地区もありますので講習会や各大会等で情報発信していきたいと考えてます。
- 3) どうしてもボールのみを視野に入れている。オフェンスも動きがないし、エースが基本的に攻めることが多いので、DFというよりOFの問題が大きいように思います。
- 4) 支部によっては、全チームに共通理解がまだまだ図れずに、勝利至上主義で子供たちに指導していたり、マンツーマンコミッショナーに対して、横柄な態度を取る指導者がいたりする。ベテラン指導者が特にその傾向にあるので、何とかその部分を統一できるように講習会を各支部で必ずやらせてもらえるようにしている。
- 5) トラップを推奨しないにも関わらず、散見される状況（特に低学年などが入る前半）の解消（例：後半だけに制限する）、また引いたマンツーマンディフェンスが増加傾向のため、スリーポイントシュートを導入してほしい。
- 6) フルコートディフェンスでトラップを仕掛け続けるチームが増えています。マンツーマンからは少しかけ離れているような気がします。うまく注意を促していけたらいいとは思いますが。
- 7) コミッショナーが配置されない試合で「もっとマークマンから離れて守れ」などの指示があった。
- 8) トラップありきの指導、ゲームが多く見受けられる現状があるようである。
- 9) チーム帯同のため判定に差がある。認識が違う。徹底していない。
- 10) 自県では、あきらかにトラップが増えたようなこともなく、あまり神経質に旗が上がるわけではないが、常時起こらない現象に対して、どこまで旗を使用すべきかの判断に悩む。

- 11) ①2023.4基準規則改定以後、「完全にゾーン」なものに旗を上げ、それ以外はその時の瞬間だけで判断しない、となっています。実際に1年半ほどの運用を行い、現場的には赤旗まで行くことが少なくなったように感じますが、判定面での変化 + マンツーマンが浸透してきたの両面かと思います。ただ、まだ以前の感覚で瞬間的に「あれはゾーンだ」「なんで上げないのか」などの反応も残っているのが現状と感じています。まして判定する私たちMCサイドにも「さっきの試合はさすがに上げないといけなかったのでは」など、判定を浅くしていく方向性の中で時に悩み、間違うことがまだまだあるところです。現行の基準規則が現場運用レベルに下りてきての着地点として、県内全ての人理解・納得できる運用をMCとしてできているか、は課題と感じています。他県ではどのように現場レベルで運用されているかは気になるところです。
- ②U12でもトラップにおける三要件の撤廃が成されましたが、あれ以降どうしてもボール中心でなし崩し的に数的優位で守る戦術は増えたと感じています。「育成年代では推奨されない」との基準規則文言がありますが、努力義務としてですのでMCサイドとしては試合の成り行きを見守るだけです。
- 12) 昨年の改定以降トラップを多用するチームが増えたと感じる。その流れの中での旗の対象となる事象が見受けられる。

まとめ

- ① トラップの多用
- ② 制限区域のステイ、フルコートでの離しすぎ = マッチアップをしない
- ③ 3ポイント導入

マンツーマンディフェンスの基準規則

まえがき

〔2022 年改訂に至る経緯と改訂の目的〕

2015 年からのマンツーマン推進の取り組みについて、U12 においては「1989 年ゾーン禁止の取り組み、その後撤廃」の過去を踏まえて厳格に行ってきた。また「マンツーマンディフェンスを指導する」という「教育的な意味合い」を持たせたことにより、黄色旗の上がる回数が U15 より多くなった。黄色旗を頻度高く上げる取り組みは、マンツーマン推進浸透に貢献をしたが、一方で子どもたちへのプレッシャーやマンツーマンコミッショナーの判定基準統一の難しさ等の課題が浮き彫りとなった。

これらの経緯を踏まえ、「マンツーマン推進は、子どもたちの将来を見据えて継続する」が、U12 において「子どもたちがバスケットボールを楽しめる環境作り」を再考し、「バスケットボール本来の在り方に近づけること」を目指すことを改訂の目的とする。

この改訂により、ゾーンディフェンスを許容する事に戻るのではなく、子どもたちの成長のために、将来を見据えたバスケットボール環境構築に向けて、指導者・保護者・関係者が一体となって進むことを望みたい。

〔マンツーマンコミッショナー設置の目的〕

マンツーマンコミッショナー(以下、「コミッショナー」)設置の主な目的は、マンツーマンに対する理解を推進し、円滑に試合運営を行い、子どもたちがよりバスケットボールを楽しめる環境を構築することであり、試合における違反行為を取り締まることではない。

【マンツーマンディフェンスとは】

- ① マッチアップが 5 人共に見られること。
- ② スイッチは可能であるが、エリアを守り続ける目的のスイッチは許容されない。
- ③ オンボールディフェンスは、マッチアップし、ボールマンのシュート・ドリブル・パスを制限しようとする。
- ④ オフボールディフェンスは、マークマンとの関係により、ポジショニング・ビジョンを取ること。ヘルプ、トラップ、ローテーションが発生することは可能とする。
- ⑤ マッチアップの状況からポジショニング・ビジョンが適切ではない状況が生じた場合、組織的、意図的でなければ個人のミス、技術不足、判断であると見なして、瞬間の現象を捉えるだけではゾーンディフェンスであるとは見なさない。
- ⑥ マッチアップの状況からトラップが生じた場合、ゾーンディフェンスをしているとは見なさない。但し、これを意図的、組織的に連続して行う場合は目指すマンツーマンディフェンスではない。（スクランブルディフェンス状態）

【ゾーンディフェンスとは】

- ① ディフェンスプレーヤーが特定のマッチアップを意識せず、組織的、意図的にエリアを守ること。
- ② マークマンの動きに対して、適切なポジション対応をしていない（例：マークマンについていかないこと）状況が継続的に行われていること。
- ③ マークマンの動きに関係なく、ボールマンを守り続ける状態。
- ④ 隊形を問わず、5 人・4 人・3 人・2 人・1 人がエリアを守るもの
- ⑤ マッチアップが明確ではない状態が続くディフェンス（例：トラップを続ける中で途中エリアを守る等）

■ 重要な視点

- 1) マッチアップしているか、マッチアップしようとしているか
(人=マンツーマン、場所/エリア=ゾーン)
 - オフェンスのスタート
 - カッティングについていくか
 - トラップの後
 - ペネトレーションに対するヘルプの後

- 2) オフボールディフェンスのポジショニング、ビジョン（ボールとマークマン）を取ろうとしているか

4. 依頼事項

- ① 都道府県内での情報展開（U12/U15 MC/指導者）
- ② 都道府県内でのU12/U15 マンツーマン対応の連携